琉球大学学術リポジトリ

序章：先島地域におけるフィリピン人女性の調査研究とフィードバック

メタデータ	言語:
	出版者: 沖縄移民研究センター
	公開日: 2018-11-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 野入, 直美, Noiri, Naomi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010095

移民研究 第 11 号　2016　1-5

特集「沖縄・先島地域のトランスナショナルな移動と社会関係 —フィリピン人女性を中心に—」
—序章　先島地域におけるフィリピン人女性の調査研究とフィードバック

野 入 直 美

Ⅰ．研究の課題と本特集の構成

本特集は，科学研究費補助金研究「沖縄・先島地域のトランスナショナルな移動と社会関係 — フィリピン人女性を中心に —」（2013 ～ 2015 年度，基盤研究（C）課題番号 25380680 代表：野入直美）の成果をまとめたものである。

この研究では，これまで総合的に研究されてこなかった島嶼地域，とくに沖縄の先島地域におけるトランスナショナルな人の移動と社会関係について，フィリピン人女性の結婚移住を中心に，調査データによる実証的分析を行った。調査は６名から成る共同研究者が合同で行い，沖縄在住のメンバーが補足調査をしてデータを共有したが，分析についてはそれぞれの専門領域を活かし，個別のテーマで行っている。

本特集の第１章，拙稿「沖縄･先島諸島に暮らすフィリピン人女性たちの生活世界 — ネットワーク，リーダーシップと次世代継承を中心に —」では，石垣と宮古におけるそれぞれのフィリピン･ネットワークの構成要素，ネットワークを支えるリーダーシップの構造，およびエスニシティをめぐる次世代継承について分析している。島嶼という，移動の自由が制限された空間において，フィリピン人女性どうし，さらに当事者と地元の住民とが「顔を突き合わさざるを得ない関係」をもち，カトリック教会を重要な結節点として相互行為を展開していることがあきらかになった。第二世代については，フィリピンルーツにアドバンテージを感じつつも，それを資源化しきれない若者たちの経験について考察を試みた。

第２章，高畑　幸による論考「沖縄・先島諸島のフィリピン人女性たち — 島の結婚移民として —」では，離島における結婚移民の定住への条件と，彼女らの地域社会における役割を再考している。そこでは，彼女らの定住を可能にした社会的要件，彼女らが地域社会に溶け込んでいったプロセス，そしてフィリピン人女性たちの地域社会への貢献について，とくに宮古島の周辺にある小規模離島であるＡ島の事例を中心に分析している。興行労働経験のある女性たちが結婚移住し，あるいはフィリピン人女性どうしの紹介婚で来島しているパターンが多く，地縁，血縁，社縁と模合による当事者どうしの緊密な結びつきが存在することがあきらかになった。興行労働経験がひとつの端緒となって結婚移民につながっていること，結婚後はサービス業に就く女性が多いことなどは沖縄県外の都市圏におけるフィリピン人の状況と共通しているが，石垣・宮古に特徴的なこととして，技能

名称未設定-1　1　　2016/05/09　1:20:18

実習生などの流入がないことから，在住フィリピン人の同質性が高いこと，地域の気候や慣習がフィリピンと類似していることも適応を助けていることが指摘されている。

第３章の松田良孝による論考「沖縄県石垣島にみられるフィリピン人ネットワークの態様―カトリック信仰を核に構築されたつながり」（論考）では，月に一回，フィリピン人信者の家庭で行われるマリア信仰の集いである「ロザリオ」を中心に彼女たちの信仰生活を描き，ロザリオがフィリピン人女性たちの同郷意識の確認を促す機能を果たしていることをあきらかにしている。「ロザリオ」は，教会で行われるミサとは異なる形で，フィリピン人女性たちの信仰生活を充実させている。信仰の集いが終わった後は，持ち寄ったフィリピン料理を囲み，郷里の言葉で会話を楽しむひとときがある。「ロザリオ」の場にあるマリア信仰，フィリピンの食と言語は，石垣島に在住するフィリピン人女性たちにとって，すべてが郷里と自分を，そして石垣島のフィリピン人女性どうしを結びあわせ，そのつながりを再認識させる文化であることが描きだされている。

第４章，中西尋子による研究ノート「結婚移民のフィリピン人女性の増加とカトリック教会」では，カトリック教会にフィリピン人信者たちの増加が及ぼしたインパクトについての分析が行われている。とくに日本人信者の高齢化が進む中で，子育て世代であるフィリピン人女性たちの参入は，カトリック教会になにをもたらしたのかということが考察のポイントとなっている。

そして最終章，矢元貴美による論考「フィリピンにルーツを持つ子どもの離島における社会関係 ― 沖縄県に暮らす障がいのある小学生の事例から」では，特別支援学級に在籍しているひとりのフィリピンルーツの子どもに注目し，彼が学校や地域社会のどのような場で周囲とのつながりを構築しているのか，またどのようなつながりをつくっているのかを，母親へのインタビューや支援団体，支援者からの聞き取り，参与観察によって考察している。調査を通じて，Ａくんが，学校だけでなく地域の２カ所の事業所と教会につながりをもっており，そこを自分の居場所として感じていることが明らかになった。教会は，信仰の場であるだけでなく，フィリピンへのつながりの場としても機能している。Ａくんは，母親の自助努力もあって，複数の回路から地域社会とのつながりを持つことができているが，自立という面では課題も残されていることがあきらかになった。

Ⅱ．調査の方法とフィードバック

1．調査地と対象の概要

本研究において調査フィールドとなった石垣島は，人口約４万９千人，外国人登録者数は 258 人（2013 年調査時）で，外国人の人口比はきわめて小さい。ただし，1970 年代に日本国籍の取得を行ったため，外国人住民としてはカウントされない台湾系の住民がおよ

名称未設定-1　2　　2016/05/09　1:20:19

そ 500 人, 在住しており, フィリピン人は彼ら植民地時代からの外国系住民に対してニューカマーという位置づけになる。フィリピン国籍の外国人登録は，1980 年代まではほぼ皆無であったが，1990 年代から増え始め，1996 年には外国人登録者数において中国を上回った。それでも 2003 年の 65 人をピークとして漸減し，近年は 50 人前後で推移している。その圧倒的多数は女性である。

宮古には，石垣島における台湾系住民のような，植民地時代にルーツを持つ外国人のグループは存在しない。人口約 5 万 5 千人，外国人登録者数 202 人で，そのうちフィリピンは 88 人である（2014 年調査時現在）。フィリピン人住民は，外国人登録者数の上でも実態においても宮古で最多数の外国人であり，そのほとんどはやはり女性である。石垣島を中心とする八重山諸島においては，フィリピン人女性は石垣島に集中し，周辺離島にはほぼ皆無であるのに対して，宮古島では，周辺の離島にもフィリピン人女性が定住していることが特徴的である。本研究の調査では，そのようないくつかの小さな離島にも赴いた。以後，本稿で「宮古」と表記する場合は，宮古島だけでなく周辺離島を含んだ宮古圏域を指すものとする。

2. 調査の方法

1）石垣島調査

石垣島では，2013 年の 7 月にフィリピン人女性を対象として，フィリピンからの移動の経緯についてのアンケート調査を実施し，16 枚を回収した。事前に調査の主旨を文書で説明した上で，カトリック教会で行われた英語ミサに参加し，出席者に，日本語，英語，タガログ語で準備した調査票への回答を依頼した。また，リーダーの女性 (I-1) に調査票を託け，出席していなかった人にも協力を依頼してもらった。調査票は後日，I-1 からの郵送によって回収した。

同年 8 月，石垣島で共同研究者全員によるインタビュー本調査を行った。設問は，フィリピンでの生い立ちと石垣島までの移動の経緯, 石垣島におけるフィリピン女性どうしの，さらに家族や地域との社会関係，カトリック信仰，子育て，老後の展望についてのもので，半構造的インタビュー調査によってライフヒストリーを聞き取った。

インタビューの調査協力者は，アンケート調査に協力できる旨を記入してくれた人にまず聞き取りし，その紹介で機縁的に広げる形をとった。インタビューに先立って，聞き取りで用いる言語の希望を聞き，タガログ語の場合は，タガログ語を話すことのできる高畑幸と矢元貴美が主なインタビュアーを務めた。他の調査者は主に日本語で聞き取りを行い，二人一組で数時間の調査を行った。

同年 10 月，沖縄本島のカトリック小禄教会で開催された，沖縄県内に在住するフィリ

名称未設定-1　3　　2016/05/09　1:20:19

ピン人のカトリック信者の集い，第 2 回フィリピン信徒集会に参加し，参与観察を行った。また 11 月には，カトリック石垣教会創立 60 周年記念行事に参加し，参与観察を行った。さらに 2014 年 5 月に石垣島で，フィリピン人女性とその支援者，関係者を対象とする追加調査を行った。合計で石垣島在住のフィリピン人女性 9 名，その子どもである第二世代の若者 1 名，関係者 4 名にご協力をいただいた。この関係者は，フィリピン人女性の配偶者，教会や教会に隣接するカトリック系の私立小学校でフィリピン人女性と関わりが深い地元の人などである。

音声データは協力者の了解の上で録音し，反訳した。タガログ語の音声データはフィリピン人留学生が訳し起こしを行い，高畑または矢元が確認した。

石垣島調査のコーディネートとラポールは，石垣在住のジャーナリストである松田良孝が中心となって行った。

2）宮古調査

宮古島では，2013 年 8 月にフィリピン人女性たちが集う「教会模合」に参加し，参与観察と調査への協力依頼を行った。宮古のフィリピン人女性たちは，通常の模合と同様の持ち回りの互助融資を行うが，集金の 1 割を教会に献金する「教会模合」を実施している。2014 年 7 月に「教会模合」に参加し，アンケート調査を実施した。回答者にはその場で記入してもらい，回収した。同年 8 月には，調査メンバー全員によるインタビューの本調査を実施した。インタビューの内容と方法は石垣調査と同じである。

同年 11 月末に沖縄本島のカトリック読谷教会で，第 3 回フィリピン信徒集会に参加し，石垣，宮古からの参加グループの参与観察を行った。また，宮古在住のフィリピン人女性を母親に持ち，沖縄本島で大学に通っている第二世代の若者たちのインタビューを行った。さらに 11 月には沖縄県外で，宮古在住のフィリピン女性を母親に持ち，専門学校に通っている第二世代の若者のインタビューを行った。2015 年 8 月にはリーダー層の女性と面談し，状況をアップデートした。合計でフィリピン人女性 12 名，第二世代の若者 5 名，支援者など関係者 3 名からインタビューのご協力をいただいた。

3．地域社会へのフィードバック

1）石垣島調査のフィードバック

石垣調査で得られた知見は，2014 年 11 月に，石垣島で発行されている地元誌『月刊やいま』に「石垣島のフィリピン女性は今 ― フィリピン台風被害から 1 年」と題した特集を掲載し，松田，高畑，矢元，水田，野入がコラムやインタビュー記事を執筆した。

内容は，前年にフィリピンを直撃して甚大な被害をもたらした台風 30 号から 1 年を経

名称未設定-1　4　　2016/05/09　1:20:19

たことを踏まえて，被災地の様子，石垣島に広がった被災地支援のネットワーク，石垣島へのフィリピン人女性の渡航と定住，災害時のフィリピン人の相互扶助などをとりあげた。石垣島とフィリピンの距離を示す地図，フィリピン料理の写真入り解説を盛り込み，地域の人びとにフィリピンへの関心を喚起するものになるよう心掛けた。

掲載にあたっては該当する箇所を英訳し，調査協力者に了承を得た。調査協力者には掲載号を贈呈し，カトリック石垣教会には掲載号と併せて，掲載号で紹介したフィリピンを知るための書籍を贈呈し，信者の皆さんが手に取れる書架に置いてもらった。

さらに，松田は 2014 年 10 ～ 11 月にかけて，八重山毎日新聞で，石垣島のフィリピン人女性についての全 30 回の連載を執筆した。

2）宮古調査のフィードバック

宮古調査については，沖縄本島で刊行されている地元紙である沖縄タイムスに 3 回の連載を掲載し，高畑，松田と筆者が執筆した（2015 年 7 月 14 ～ 16 日）。掲載紙は調査協力者に送付した。

新聞に掲載するにあたって，該当する文章は英訳の上で調査協力者に確認してもらい，要望にそって削除や修正を行った。

宮古調査のフィードバックも，石垣調査のそれと同様に日本語によるものである。読み手としては，フィリピン人女性たちの配偶者や近隣の人びと，地域の人びとを想定し，石垣・宮古の地域社会に向けた情報の発信や関心の喚起をはかるものとした。

さらに 2016 年 1 月に宮古島のフィリピン人女性の集いに参加し，調査結果を英語とタガログ語でフィードバックした。

（のいり　なおみ・琉球大学法文学部准教授・社会学）

名称未設定-1　5　　2016/05/09　1:20:19